係を超越したる内訌を惹起した。是を以て十月二十日直常は兵を起し、廿三日氷見湊に進んで、志雄保なる石王丸の領境を侵すの形勢を示したから、得江氏一族は志雄越を守つて屢交戈した。十一月三日井上布袋丸・富來俊行、富來院を出て花見槻(鹿島郡花見月)に向かうたので、四日石王丸代長野彦五郎季光は之を飯田(羽咋郡飯山か)に擊破し、後更に越中に驅逐した。この日能登の守護桃井兵部大輔義綱、京師より下着した。從來の守護吉見頼隆は改易せられたものと見える。十九日直常の弟桃井兵庫助直信越中より能登に侵入し、陣を鹿島郡高畠に張り、十二月一日得江石王丸の領を襲うたが、長野季光の爲に擊退せられ、次いで桃井義綱は鹿島郡金丸城に在つたが、十二月十三日直信の軍來り攻めたので、季光は又之を破つた。翌正平六年(觀應二)二月尊氏、直義と和して共に京に歸り、七月播磨に兵起つて義詮その征討に上つたが、得江石王丸代長野左衞門四郎光信之に從ひ、石王丸は直義から本領安堵の命を得た。これは當時直義が政務を執つたからである。然るに幾くもなく尊氏・直義の和復破れ、直義は桃井直常の獻策を容れて越前金ヶ崎に下つたので、尊氏は之を討たんが爲、八月十八日京を發し近江に入つた。この役長野光信は尊氏方であつた桃井義綱の軍に屬し、九月十二日近江八相山に陣した直常の營を突きて越前に退却せしめ、十月十四日尊氏に從うて洛に歸つた。

(四)吉見氏の再起—正平六年(觀應二)八月吉見三河守氏頼は、鹿島郡三引保なる赤藏寺に在つたが、十八日桃井刑部大輔直信が來攻した爲苦戰した。この時長左衞門秀信は氏頼を救援せん爲同郡大津を發し、得江石王丸代長野彦三郎家光も之に屬して戰ひ、廿一日敵を越中に退けた。正平七年(觀應三)二月直義は尊氏に弑せられ、六月六日氏頼は能登を平定して越中に入り、當時宮方になつてゐた桃井播磨守直常・刑部大輔直信・民部少輔直廣を破つた。能登島東方の地頭職天野安藝三郎遠政代たる堀籠六郎左衞門宗重、得田素章代たる子息齋藤六章房も之に從ひ、後素章は尊氏から感狀を得た。この時吉見三河守氏頼は既に能州守護と書かれてゐる。而して前守護桃井義綱は前年十月尚その職に在つたが、何れの時に交代したかを明らかにせぬ。

(五)武家方の勝利—正平八年(文和二)八月廿八日吉見修理亮は、桃井兵庫助(これは兵庫助直信と別人である)及び長新左衞門亂連を討つ爲能登島に發向し、得田素章代齋藤六章房は亂連の館を燔いて西方金顯城に蟄伏せしめ、正平十年(文和四)三月十七日には天野遠政代堀籠六郎左衞門宗重等金顯城に押寄せ、六月十四日それを陥落せしめた。正平十七年(貞治元)桃井中務少輔直和等越中に蜂起し、正月足利義詮の能登の地頭家人に追伐を命じたが、五月桃井氏の軍石動山に據つて能登の武家方と戰うた。同月能登の宮方は羽咋郡富來院木尾嶽城に據り、武家方は之を攻めて富來齋藤次等を討取り、七月また宮方の富來院尾崎城を陥れ、次いで石動山の桃井民部少輔直廣の降を容れ、木尾嶽城を追落した。この際何人が能登の武家方を總帥したかは明らかでないが、前來の關係によつて察するに、恐らくは吉見氏頼であつたらう。正平廿四年(應安二)四月廿八日桃井播磨守直常越中松倉城を發して能登に入つたが、得田加賀介章房は金丸城の吉見左馬助に隨ひ、得江八郎次郎季員(前の石王丸であらう)は能登部城の吉見伊豫入道頼顯に屬し、六月一日に至つて越中軍を退けた。頼顯は氏頼の從兄弟で、左馬助は頼顯の子であらう。八月季員また吉見氏頼の下向を加賀に迎へ、左馬助の配下に在つて平岡野・大野・松根に戰ひ、十二月廿八日得田章房は同族十郎章親と共に、珠洲郡若山庄山方庄の山方六郎左衞門を討ち、晦日之を陥れた。後に建德二年(應安四)七月桃井直常再び兵を越中に擧げ、吉見氏頼の軍はかの國に侵入して、廿八日五位莊に戰うたが、八月守護斯波義將の歸るに及び、直常陣を撤して松倉城に籠り、遂にその所在を晦ました。多年に渉る吉見・桃井二氏の拮抗こゝに終局し、能越悉く武家の勢力範圍となつた。

ヨシミウヂヨリ　吉見氏頼　頼隆の子であらう。正平元年(貞和二)・三年(貞和四)の文書には掃部助、六年(觀應二)・七年(觀應三)・八年(文和二)の文書には三河守、建德二年(應安四)の文書には右馬頭入道及び沙彌道源と見える。又正平七年(觀應三)六月以降氏頼を能州守護とするが、前年十月には尚桃井兵部大輔義綱が守護であつたので、その間に交代したものと考へられる。

ヨシミサマノスケ　吉見左馬助　諱不詳。正平廿四年(應安二)四月鹿島郡金丸城に居り、同年八月は吉見三河守氏頼の下向を迎へて加賀に入り、桃井中務少輔直和の軍と野々市・平岡野に戰うたことが見える。左馬助は伊豫入道頼顯の子であらう。

ヨシミサモン　吉見左門　初めて前田利家に仕へた。子孫藩に世襲する。

ヨシミシユリノスケ　吉見修理亮　諱不詳。正平八年(文和二)八月能登島に長亂連を討つたことが見える。

ヨシミツ　吉光　加賀の刀工。賀州住吉光、明治二年春吉日など〻切る。

ヨシミツ　吉光　能美郡山上郷に屬する部落。

ヨシミヅ　義水　刀工。刊書に加州金澤住忠兵衞義水同二代と書いたものがあるのは誤である。忠兵衞義水は越中今石動住で、享保頃の人、一代限りである。

ヨシミツホ　吉光保　能美郡に在つた。建仁元年七月の菊大路家文書に見えて、その地重友保と接してゐたが、位置は明らかでない。

ヨシミヨリアキ　吉見頼顯　伊豫入道。正平廿四年(應安二)鹿島郡能登部城に居たことが見える。頼顯は頼隆の兄頼爲の子である。

ヨシミヨリタカ　吉見頼隆　大藏大輔。能登の守護。興國五年(康永三)・興國六年(康安四)・正平元年(貞和二)の文書に見える。正平五年(觀應元)十一月には桃井義綱が守護となつて居るから、頼隆はこれより前に罷めたと思はれる。

ヨシミキサブロウ　吉見亥三郎　諱は爲得。實は山口良助の子であつたが、慶應二年藩の老臣本多氏の家士吉見爲次に養はれ、徒組に班した。明治元年加賀藩の兵を越後に出した時之に從ひ、四年十一月廿三日同志と共に故主本多政均の仇岡野悌五郎を討ち、五年十一月四日自裁を命ぜられた。享年廿二。

ヨシムラゲンダ　吉村源太　鳳至郡穴水大